

自衛団の聖女

詩鈴

奪われた聖痕



天戸祐輝

表紙イラスト：ヨシカ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『自衛団の聖女 詩鈴 ～奪われた聖痕～（前編）』
『自衛団の聖女 詩鈴 ～奪われた聖痕～（後編）』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



自衛団の聖女

詩鈴

奪われた聖痕

天戸祐輝
表紙 / ヨシカ

登場人物紹介

Characters

ふうきしりん

布浮詩鈴

日遥ひようという名の島国の南に位置する雲槍くもやりの国に生まれ育った少女。故郷を襲う人外との戦闘にその身を投じている。生まれながらに人外と戦う力を持つが、訓練不足のせいか使いこなせていない。

じかる

地苛硫

日遥を襲う人外の王・十二陵とにりょうがい戎の一人。全長3メートルのイモ蟲に、人間の腕が幾つも生えたバケモノ。口からは粘着性のある糸や毒霧を吐くことができる。

モミの木を象った日遥という島国の南。

幾つかある根部分の一番東にある雲槍の国。その国境付近で、小規模な戦が繰り広げられていた。

片方は雲槍の国を守るために編成され、国境付近に常駐している自衛団。そしてもう一方は、蟲や爬虫類と人間が混ざった、螺^ら鋸^{びょうしゅう}衆^{しゅう}という半人半魔の人外たちだ。

「お前たちのような醜^{みにく}き者、私たちが絶対にこの国に入れさせはしないわっ！」
ズサツ！

「ギイギヤアアアアアアアアアッ！」

戦場には不釣りあいなほど透き通った女性の声^{こゑ}が奏^ねでられ、同時に醜^{みにく}い人丈大^{じんぢやうだい}の^{あり}人^{ひと}が真^まつ二つに斬^きり裂^れかれた。

「さあ、次は誰^{たれ}っ！」

一匹^{ひとひき}の人外^{にんがい}を葬^{むす}り奏^ねでられた美^{うつく}し^い声^{こゑ}。その声^{こゑ}に誘^いわれるように、幾多^{いくた}の人外^{にんがい}が彼女^{かのじよ}のほうに振り向き、ドス黒^{くろ}い眼^{まなこ}に邪^{よこしま}な感情^{かんじやう}を漲^{あふ}らせていく。

それは欲望^{よきぼらう}のまま行動^{こうどう}する人外^{にんがい}にとつて、当然^{たうぜん}ともいえる感情^{かんじやう}だ。

彼ら^{かれら}の眼^{まなこ}には、濃い青色^{あいなほいろ}のショートカット^{しよーとカット}の髪^{かみ}を風^{かぜ}になびかせる、二十代前半^{じふにさいぜんぱん}の女性^{にょせい}が薙^ひ刀^{とう}を構^{かま}え、凜々^{りんぜん}しく立^たっている姿^{すがた}が映^{うつ}っている。

戦場^{せんじやう}には似^につかわしくない、少女^{しょうじよ}の雰^{ふん}圍^ゐ氣^きを輪郭^{りんかく}に残^{のこ}すその彼女^{かのじよ}は、切れ長^{きりなが}な目^めを険^{けん}し

く吊り上げ、黒い瞳をキラキラと輝かせながら、襲い来る魔物を次々と斬り倒していく。

「いくらでもかかってきなさいっ、全て葬ってあげるわっ！」

気合の声とともに、彼女が鼻筋の通った高い鼻を、巨大なゴキブリを思わせる人外に向けた。口紅を塗ってないにもかかわらず、薄ピンクに輝く良形な唇は口角が少し吊り上がり、まるで笑みを零しているように見える。

「生意きな小娘ガ、その身体ヲ^{なぶ}黴りツクシ、俺ノ仔を孕マせてヤルっ」

ゴキブリ人外が、背の翅^{はね}から耳障りな音を鳴り響かせ、涎を垂らしながら薙刀を構えた彼女に襲いかかってきた。

人外からだけでなく、人間から見ても彼女は魅力的な肉体をしている。

袖なしで裾の短い紅い着物に、異国製のヒラヒラとした紅いミニプリーツスカート。そして髪と同じ色の帯でくびれた腰を締めた彼女は、人外から見れば美味しいご馳走そのものだ。

和洋折衷の衣服に包まれた細い肢体は、着物越しでも掌では包みきれない双乳の膨らみ^みが分かり、くびれた細腰が肉体のおうとつをさらに強調している。細腰から急激な丸みで膨らんだお尻は、ミニスカートの後部を蟲惑的に持ち上げ、スカート裾から現れるムチムチとした太腿が、透き通るような白い肌を戦場で輝かせた。

「泣キながラ後悔スルがいい、非力な人間風情ガ、俺タチ螺鋏衆に刃向カッタ愚っ!？」

ズザッ！ ドサッ……。

貌も^{かお}肉体も、十二分に美しい彼女を我がものにしようと襲いかかったゴキブリ魔物。しかし、その節足が美女の肢体にふれる寸前、薙刀の一振りがその蟲体を両断した。

「後悔するのは、気持ちの悪いお前よっ！」

侮蔑の言葉とともに分断した蟲人を一瞥し、黒瞳に自分の姿を見ている人外の群れを映す。

「この国に、その汚い足を踏み入れたことを後悔なさいっ、はあああああああつっ！」

薙刀の刃を鈍く輝かせ、気合の声を張り上げた美女が人外の群れに突っ込んでいく。

「待て詩鈴っ！」

自衛団の仲間が、無謀ともいえる彼女の突撃をとめる。

しかし彼女はとまらない。

勝つ自信はある。純粹な力での戦いなら詩鈴は男には敵わない。しかし、人外相手なら

話は別だ。

彼女は振り回す薙刀の一撃で、確実に螺鋌衆を叩き斬り、またたく間に大半の人外を倒していく。その姿は戦場に舞い降りた戦女神のように美しく、そして、同時に残酷でもある光景だった。

自衛団たちがその光景に目を奪われている間に、光り輝く薙刀の刃は次々と蟲人たちを

斬り倒し、その刃先を最後の人丈大のアリ人に向けた。

「このバケモノ女メ！ 俺がソノ身体を裂いて、犯しながら食って……」

ズサッ！

「グギャアアアア——ッ！」

「失礼な蟲人ね、か弱い私をバケモノだなんてっ」

蟲人にバケモノと言われたのが、よほど頭にきたのだろう。

詩鈴は人外の言葉を最後まで聞くことなく、素早い薙刀の一振りです相手の上半身と下半身を斬り離れた。

「グベベ……。本当……にバケモノ染み……た女ダ……、しか……し、ソノ程度の力……我ラ的首領には通ジン……」

身体を上下に分断されたアリ人が、足元の地面に倒れたまま途切れ途切れの声で話しかけてきた。

「俺タチの恨みハ……頭ガ晴^{かしら}ラシテくれ……その白イ布に……包まレたマ○コを貫かれ……泣きなガら喘ギヤガ……」

「うるさいっ！」

「グギャッ！」

スカートの中を見ながらしゃべっていた人外の貌を、彼女は感情のまま薙刀の刃で突き

刺した。

異国下着を見ながらとどめを刺された蟲人は、呪いのような言葉を最後に、その醜い身体をグズグズと溶解させていく。

「これで終わりね、ふう……」

周りを見渡し、人外が一匹もいないことを確認した彼女は、身体の緊張を解いて溜め息を零した。

自衛団にも多少の怪我人は出たが、命を落とした者は一人もいないようだ。

「まったく、無茶しやがって……。大丈夫か？ 詩鈴」

「隊長……」

薙刀の刃を地面に突き刺し、手近な木の根に腰を下ろして休もうとした詩鈴に、彼女の身を心配した自衛団の隊長が、武骨そうな貌に笑みを見せながら話しかけてきた。

大柄で口元に無精ヒゲを生やし、紺の小袖と袴に身を包んだ彼は、いかにも傭兵あがりといった風貌の男である。

自衛団の中でも屈強な戦士の一人であり、詩鈴も幾度となく窮地を救ってもらったことのある、もつとも信頼のおける仲間だ。

「本当に、とんでもない女だよ、お前は。一人で三十匹も倒しやがって、国ではお前を自衛団から引き抜き、武士隊の隊長にしようっていう話まであるほどだよ」

「そんなこと……」

美貌を赤らめさせ、彼女は思わず照れてしまった。

誉められるのは悪い気分ではない。それに、人並みはずれた実績をあげている。

今の戦いでも、自衛団の猛者^{もさ}たちが二・三体倒すだけでやつとという人外を、彼女はたった一人で三十体以上は倒しているのだ。

「謙遜しなくてもいい。今日は疲れただろう、早く駐屯所に戻って休むぞ。今日は人外どもの襲撃を防いだことを祝い、皆に祝杯を挙げるぞっ！」

「はいっ」

戦っていた時とはまったく違う、まるで少女のような笑みを見せた詩鈴は、地面に突き刺していた薙刀を持ち、隊長たちとともに、自分たちの宿舎である駐屯所に戻っていった。

※

『俺なんかこの刀でバッサバッサとだな』

『なに言ってるやがる、刀振り回しながら逃げ回っていたクセしやがって』

『がはははははははははっ！』

湯浴みを終え、タオル一枚の姿で自分の部屋にいる詩鈴に、階下の部屋で勝利の宴をしている仲間たちの笑い声が聞こえてきた。

みんなかなり呑んでいるらしく、上機嫌になった声が迷惑なほど大きい。

「いつ螺鋌衆が襲ってくるかも分からないのに、みんなけっこう呑んじゃってるわね……。大丈夫かしら？」

ひとり言を溜め息混じりに呟く。

この雲槍国は、日遥の南に位置する小国である。周りを海に囲まれているが崖が多く、あまり漁にも田畑を耕すにも適していない、さほど裕福ではない国だ。

しかし、人々が暮らしていくには問題はなく、侵略する価値もないことから螺鋌衆には狙われず、他国と比べてかなり平和な国だった。

しかし、ここ数年は螺鋌衆が国に入り込もうと国境沿いで小競りあいになることが多くなっている。

「もしかして、一つ国向こうの魅幌国みほろが、復興したことが関係してるのかしら？」

ふと思ってしまった。

十数年前に当時の城主が、人外最強をうたう十二陵戎に属する羅丞らじょうという強力な魔物に暗殺され、人外によって支配されていた国が、最近、城主の忘れ形見である聖痕せいこんを持った姫の手で解放され、復興したという話を聞いた。

もしかしたら、その国から追い出された人外が、この国に逃げ込もうとしているのかもしれない。

(聖痕を持った者の手で、あの十二陵戎が本当に倒せるのなら……)

体は気持ちの悪い蟲の触手と手に喜び、淫部が強烈な焦燥感と切なさに包まれ始めた。

大の字に拘束された肢体は、細い腰をくねらせながら悶え、お尻が自然と動いて触手のピストンを速めてしまう。

「ヌヒヒヒヒッ！ そろそろ頃合のようだな。その清き肉体、今から我のものにさせてもらうぞ」

肉体の発情に対処できない処女を自分のものにするべく、地苛硫が蟲体を動かし、男の腕ほどある巨大なペニスの切っ先を秘孔に押しつけてきた。

「くあんんんっ、熱いのがアソコに……っ!!」

自分の大事なところを灼く鉄のような物体に気づいた彼女は、そこに切れ長な目を向けたと同時に瞳を見開いた。

醜い蟲のペニスが今にも自分の処女を貫こうとしている。

淫部には、拳のような龜頭が淫唇を搔き分けて秘孔に押しつけられているのを感じ、今にも小さな処女孔を貫こうとしているのが分かる。

「ただだくぞ、聖女の処女をつ！ 聖なる肉体を我の肉槍で犯し抜き、肉欲しか考えられぬ娼婦に変えてくれるっ！」

「嫌だっ。こんな……やめて……お願いやめ……」

ズニユッ！ ジュプジュプジュプウウウウウウッ！

「あぐっ!? 挿入^はつてくる……痛っ! 蟲のペニスが私の中に……嫌っ、いやああアああアああああアああアああアああアあつっ!」

とても挿入できそうもない処女孔を強引に押し広げ、巨大イモ蟲の巨肉槍が詩鈴の膣内に突き刺さってきた。

拳のような亀頭に膣壁を捲り返され、壁を擦りながら強引に狭い膣を拡張してくるペニスに聖女は悲鳴をあげ、肢体の内部に収まってくる圧倒的な存在感に全身を震わせた。

初めて胎内に感じる雄熱の灼熱感と、生物のものとは思えないペニスの剛鉄のような硬さに肉体は慄き、処女を貫かれていく悲しみに心が碎けそうになってしまう。

「もうやめて……もうこれ以上……挿入しないで……」

悲しみで心を締めつけられながら、敵に対して悲願する。

しかし、秘孔に無理やり押し込まれてくるペニスがとまることはない。淫毒に侵されているにもかかわらず、膣には張り裂けてしまいそうな痛みがはしり、今にも意識を失ってしまいそうだ。

ジュプ……ジュリユニユプ……ジュリユ……プツツ!

「ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい——ツツツ!! やだ

こんな……痛いっ……いらあああ——ッ!

お腹の奥から聞こえてきた膜が裂かれる音。それと同時に肉体を襲ってきた強烈な激痛

に、聖女は肢体を仰け反らせながら悲鳴を奏であげた。

人外の巨肉槍で処女を貫かれた身体には、淫部から真つ二つに引き裂かれたような激痛がはしり、見開いた瞳から悲しみの涙が飛び散っていく。

「グヒッヒッヒッ！ 聖女の処女を奪ってやった、ヒヒッ！ もつと奥まで突き刺して、完全に蟲の雌に変えてくれるわっ！」

「がふッ!!」

地苛硫の声とともに、処女を奪ったペニスが一気に子宮口にまで突き刺さってきた。

真夏の太陽のように熱く、生物の一部とは思えない剛鉄の硬さを有した巨大な雄性器は、彼女の中を圧倒的な重量と存在感で満たし、滑らかな腹部を歪に膨らましている。

「ああ……あぐッ、あひッ……ひいぎ……ッ……ッ……」

もう息をするのも苦痛だった。身じろぎ一つ、心臓が一回鼓動するだけで膣が張り裂けそうになり、薄壁一枚をとおして腸内の触手と触れあうペニスが、全身の毛がよだつほどのおぞましさを脳へと伝えてくる。

純潔が醜い蟲に奪われ、下半身の二孔を貫かれた屈辱と悲しみに精神はもう保てず、今にも理性が瓦解してしまおうだ。

「どうだ、膣も尻も我に貫かれた感想は？」

「くう……はあはあはあ……ひぐッ、うう……」

なにも答えられない。

肉体を内から占める悲しみと痛みに、もう言葉を発する気力さえない。

輝きを失い始めた黒い瞳には、地面に倒れた仲間たちが映り、欲情した目で自分の純潔を奪われる姿を眺めていた。

「声も出せないほど嬉しいのか？ ヒヒ、仲間たちに見られながら処女を散らして喜ぶとは、なんと淫乱な雌だ」

「わ、私は喜んでなんて……いない……はぐッ……こんな気持ちの悪いモノ……私は……ひゃふッ!? あッ……なに……身体が急に……あふッ! ひゃんッ!」

痛みしか感じなかった肉体が、再び激しく疼き、全身の肌が急速にムズクすぐつたい肉悦に包み込まれた。

痛みしか感じなかった淫部は搔き毟りたくなるような悦痒みに襲われ、膣と腸内が焦燥的な痺れに包まれながら、肉体の感度を過敏へと変えていく。

「あふッ、ドッ、どうしたの私……んあッ、身体が熱く……はふッ、んンッ!」

膣全体を痺れさせる刺激に、拘束された肢体が艶めかしくくねり、自らお尻を左右に動かして二孔に突き刺さった陵辱肉を膣と腸の壁で擦ってしまふ。

もつと力強い刺激を求め始めた両胸は、見せつけるように上下に弾ませて乳芽を触手の亀頭で擦らせ、肉房の内部に響くような悦くすぐつたさを楽しんでしまった。

「さすがに処女喪失の痛みは消せなかったか、だがもうお前は肉悦に抗えぬ本当の雌だ、私の寵愛ちようあいをその身で受け、一突きごとに喘ぎ鳴いてその身を震わせるがいいっ！」

ジュチャツッ！ ジュリュツッ！ ジュプニユプツッ！

「くはッ！ やだッ……はふッ、動くな……ひんッ！ ふひッ！」

地苛硫の言葉通り、詩鈴の肉体が肉交の快楽に抗えなくなった。

秘孔からは破瓜の証が溢れ、愛液にヌメ光る太腿を赤く染めているのに、純潔を失った痛みはもう感じなくなっている。膣内で太いペニスが律動し、壁を拡張しながら無数の膣粒が付着した襞を擦る度に、背筋は甘美な悦痺れに襲われ、頭の中で無数の蟲が暴れまわっているように理性が掻き乱されていく。

「な、なにこれ……あんツッ！ 気持ちよくなって……ッ！ なにも……考えられなく……」
理性が混濁し始めた。

先ほどまで感じていた、蟲に犯されているというおぞましさを感じなくなり。胎内の陵辱肉をもっと強く感じようと秘孔と尻孔を締めつけ、雄肉のピストンに合わせて腰を前後に振ってしまおう。

目尻を下げた切れ長の瞳は潤み、快楽に負けたことを物語るように、両胸を颯る触手と蟲手を見つけてしまった。

「くうんんッ！ あうッ、ひゃふッ！ 身体中が痺れて……私おかしく……」

「ヌヒヒヒヒッ！ なかなかよくなってきたぞ聖女よ。お前の仲間も興奮して苦しきなど忘れて見てやがる」

地苛疏に言われ、仲間たちの姿を瞳に映してみる。

敗北し、毒霧を浴びて地面に転がる自衛団の男たち。だが今の彼らの貌には苦しみの色はなく、陵辱されている自分に熱い視線を向けて興奮していた。

（ああ……そんな目で私を見ないで……）

仲間たちに犯されている姿を見られている恥辱を感じる。しかし、肌を隠そうという気が起こらない。彼らの熱い視線にまで肉体が反応し、背徳的な欲望に子宮が切なく収縮してしまふ。

「もつと奴らに見せてみたいか？」

「んあッ……はふッ……やッ、やだ……」

膣と腸を貫かれる刺激に喘ぎながら、巨大蟲が囁いてきた言葉に頭を振って応えた。

彼らの苦しみを癒やすためとはいえ、蟲との肉交姿を見せるわけにはいかない。しかし、肉体はその排他的な欲望に、膣全体をさらに激しく蠕動させ、子宮口が填まってくる巨亀頭に情熱的なキスを繰り返しながら、達してしまいそうな悦痺れを脳へと伝えてくる。

（どうして、こんなことに身体が反応するのっ!? こんな姿、本当に見せたくなんて……）
自分の身体がもう理解できない。

嫌がる心とは裏腹に、肉体が淫らな姿を見せることに喜び始めている

詩鈴の身体は、地苛硫の触手で両脚を大きく広げさせられ、巨大ペニスを突き上げられた衝撃とともに、細腰をクイツと前に突き出されてしまった。

同時に彼女を陵辱している巨大イモ蟲は、幾つもある蟲手で紅いプリーツスカートを捲り、巨大ペニスと触手が秘孔と尻孔を捲り返している様子を隊長たちに披露する。

ゴクリッ……。

「んひいいいいいいいい——ッ！」

巨肉槍を咥えた秘孔と触手を咥えた尻孔。そして薄く青い草むらから包皮から剥け出た女芽を見られた聖女は、思わず肉体に甘美な痺れをはしらせ、その美貌を仰げ反らせながら嬌声を発してしまった。

仲間たちの視線は視陵の刃となって二孔に集中し、まるで目に見えない手となって肉体を撫で回してくるようだ。

肢体は燃えてしまうほど熱くなり、いつ絶頂してもおかしくなくらい、膣が激しく蠕動している。

「んああッ！　はうッ……身体が燃えてるみたい……んうッ！」

「ずいぶんと淫乱な聖女だな、仲間にはンポぶち込まれてるマ○コを見せて感じるとは、ヒヒッ、膣の具合もよくなつて、私も射精してしまいたいぞぞぞ」

「変な……はふッ……変なこと言わないで……私はそんな女では……」

言葉でどんなに抵抗しても、淫毒で過敏にされた肉体は勝手に快楽を貪り、陵辱される姿を仲間に見せて背德的な喜びを心の中に満たしてくる。

膣はペニスが入りする度に秘孔を捲り返して愛液を溢れ返らせ、肉輪を緩めた子宮口がピクピクと震えながら、力強く突き当たってくる巨亀頭をはめ込んでしまう。

肉体の全てを侵食しようとする女悦の快感に理性は掻き乱され、黒瞳の前を横切つていく触手を物欲しそうに眺めてしまった。

「これが欲しいのか淫乱、ならばくれてやるっ。全て孔で我が仔種を受け、その聖なる肉体を穢し尽くしてやるっ！」

「こんなモノ……欲しくなんて……あうッ、はふッ、んンッ……ンふうううううううううッ!!」

瞳に映っていた触手が突然、艶めかしい声を洩らしていた詩鈴の唇を割り開き、その切っ先を喉奥にまで突き刺してきた。

しかし苦痛は感じない。

初めての口虐にもかかわらず、聖女は喉奥に感じる雄熱の塊に心地よくなり、喉粘膜を擦る鉄のような亀頭に悦痺れを感じてしまった。

口腔を占める肉幹は、口の中いっぱい雄の灼熱感と脈動を伝え、その熱だけで舌が麻

痺し、火照らされた頭の中が淫らな霧で覆い尽くされてしまいそうだ。

「んぷあッ！ んぷッ、んむッ……ちゅぱッ！ はむっ……んッ、んッ……」

口腔を犯す触手のピストンに合わせて自然と頭が前後に動き、喉肌を膨らませながら醜い切っ先を無抵抗に受け入れてしまう。

秘孔が完全に捲れ返った淫部では、巨大イモ蟲のペニスが肢体を破壊するような勢いで律動し始め、今にも彼女の胎内に精を注ぎ込もうと肉幹を脈動させ始めた。

触手を最初に突き入れられた尻孔は、すでに真っ赤に爛れながら小さな窄みから直腸の一部まで掻き出され、捲れ返った秘孔とともに、鮮やかな色を仲間と人外たちの目に晒している。

「んぷあッ！ あうッ……んッ、んッ、んッ！ んはッ！ ひゃひッ！ んン……」

（もうダメ……私もう身体中がおかしく……こんなの嫌なのに……気持ちいい……）
 肢体が限界だった。

肉体の最奥を二孔から貫かれる度に、全身が強烈な痺れに襲われて秘孔から大量の愛液が吹き出し、巨大な肉槍の形が浮き出した腹部が波打ち始めている。

膣内の襞は半痙攣を始めて肉幹に絡まり、子宮口に龟头がはまり込む度に、頭の中が真っ白になってしまいそうだ。

大きく上下に揺れる両胸は、触手と蟲手で淫らな形に歪めさせられながら、今にも弾け

そうに尖っている薄赤い乳芽から発情の汗を飛び散らしてしまい。触手幹に歪められた唇はもう濡れた吐息しか洩らせず、口角から零れた唾液が赤く染まった頬を濡らしながら、整った顎から滴っていく。

「あむッ……はふッ、あッ、んッ、んむあ……チュパッ……チュルル……」

「もう限界か雌？」

後ろから囁かれるように言われた地苛硫の言葉に、何度もうなずいて応える。

子宮はキュンキュンと収縮し、一秒でも早く雄液を飲み込もうと、醜い巨亀頭に愛液を吹きかけながら吸いついた。

「ヌヒヒヒ……ならば射精してやるっ、仲間たちに見られながら、全ての孔で我が精液を受け取るがいいっ！」

ジュプッ！ ジュリユッ！ ニュプジュリユジュプウウウウウウウッ！

「んぷうううッ！ ひヤンッ！ んンッ！ ンふあああッ！」

地苛硫の動きが人間の身体では耐えられないほど速くなり、膣壁が引き千切られるほど捲れ、とうとう子宮口を貫いた雄槍が子宮の奥壁にまで突き刺さってきた。

触手に貫かれるS状結腸は、腸壁が破られてしまうほど肉体の内にまで突き上げ、口腔を犯している陵辱肉が、喉肌を裂くような勢いで喉粘膜を擦りあげてくる。

（ひうっ!? 壊れる……こんなになれたら私……わたし……っ!）

人外の陵辱に、詩鈴は肉体の全てが破壊されてしまうような感覚に襲われ始めた。しかし屈辱は感じない。それどころか被虐的な感情が心に芽生え、このまま膣を引き裂かれてもいいとさえ思ってしまう。

肢体の内外を陵辱する巨大肉槍と幾多の触手は、その脈動を早めながら猛る雄熱を高め、今にも射精しようと切っ先を膨らまし始めた。

「ぐうおおおおつ、そろそろ限界だあ……、射精してやるぞ、聖女の肉体を蟲の精液で穢し尽くしてやるっ！」

「んぷうああ……んんッ……んッ、ひやふうううッ?! いふうや……射精ひらいふうえ……穢さらひ……んぷッ！」

胎内に蟲の射精を受けるおぞましさに、女としての理性が妊娠を恐れて美貌を左右に振り拒む。

だが巨大イモ蟲が彼女の胎内からペニスを抜くことはなく、子宮口を壊すように貫きながら、子宮壁を拳のような亀頭で叩きつけて精液を駆け登らせてきた。

「いふうや……膣^{なか}内^{なか}らけふあ許ひふいへ……んちゅパッ……お願ひ……んッ、んッ、膣内らふうえは……」

「誰がそんな言葉を聞くものか、ぐうおおつ！ イクぞ……おぐつ……ぐうおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

ゴビユプルルッ！ ビユププッ……ビユビイルルルルルルルルルルルッ！

「ンぶうんんんンッ!? 抜ひれ……イヤ……いふうやあアあああああああああ
アあああアアアア—— ツ！ ツ！ ツ!!」

彼女の願いも虚しく、処女を奪い去った蟲の精液が、悲しみに瞳を見開いた聖女の胎内に迸ってきた。

まるで溶岩のように熱く、半ば固形化したゲル状の雄粘液は、醜い拳のような亀頭から直接子宮内へと注ぎ込まれ、聖なる肉体を孕ませようと腔壁の至るところにへバリついて腹部を膨らましてくる。

腸内はまたたく間に陵辱液に満たされ、蛇腹状の筒内に染み込みながら尻孔から溢れ出し。喉は蟲精液の猛り熱で灼き尽くされ、締めつけてしまったために、肉幹に占領された口腔にまで舌が麻痺するような苦液を満たしてきた。

「んはあッ！ ひゃひいいいいいいいい—— ツ！」
プシュッ！ プシュウウウウウウウウウウウウウウ……。

注がれ続ける蟲精液の熱さに肢体が狂おしい痺れに襲われ、頭の中が真っ白に染まってい
いく。

初めての絶頂で、人間の限界以上の狂悦感に包まれてしまった肉体は、何度も雷に打たれたような極電流が暴れまわり、肉体が溶解していくような絶頂感とともに小さな尿道か

プシュッ！ プシュウウウウウウウウウウ……。

たった一回、お尻を突き上げられ両胸を搾られただけで、詩鈴の肉体には感電したような痺れがはしり、尿道から潮を噴き出しながら絶頂に達してしまった。大きく秘孔を広げた膣からは、内部に溜められた蟲精液が愛液に押しやられてゴボゴボと溢れ出し、早く膣も貫かれないとばかりに膣壁が大きくうねっている。

「んあああ……こんなの……続けられたら……私もう……」

精神が快楽に砕けてしまうような気がする。挿入される前まで、あんなに怯え、嫌悪していた黒い触手への畏怖感がバカらしく思え、膣が新たな快楽の期待感で満ちてきた。肉体はもっと激しい陵辱を求めてしまい、彼女自身もそれを願ってしまいそうになってしまう。

—— もつとして欲しいか？

「そんなこと……」

残った理性を総動員させて肉悦をこらえ、陵辱を拒む言葉を口にする。しかし、その声は小さく、少しの衝撃だけで理性が崩れてしまいそうなほど弱々しい。

—— 早く答えろ……。

ニユブッ！ ジュビッ！ ズリユッ！

「くはっ!? はひっ！ きひいいいいいっ！」

プシャッ！ プシュッ！ プシャッ！

ギリギリのところどころでこらえる聖女の精神を打ち砕くように、腸内に挿入された二本の触手が力強く三回だけピストンした。

それだけで彼女の肉体には悦痺れがはしり回り、双美乳を大きく揺らしながら尿道から潮をしぶかせてしまう。

軽い絶頂を三連続で味わわれた美貌は、蕩けたように淫らな笑みを浮かべ、大きく見開いた瞳が呆然と柱の中の天井を映した。

秘孔はドロドロと蟲精液を溢れ返しながら入り口をヒクつかせ、早く膣挿入の快楽を得たいとばかりに、自然と細腰が前後に動いてしまう。

——素直になつたらどうだ？ 淫乱聖女よ……。

「ああ……もつと……もつと欲しい……です……」

囁かれるような脳内に響く言葉に、たった数回の腸内ピストンで理性を混濁させた詩鈴は、唇の端から唾液を零しながら素直に答えてしまった。

——ならば、一生その魂と肢体を我に捧げることを誓うか？

「……っ!？」

正常な意識が「決して誓うな」と彼女に呼びかけてくる。そして、闇に誓ってしまったえば、二度と人に戻れないただの雌にされてしまうことも。

だがお尻の奥から感じる強烈な痺れと、胸を揉み搾られる痛悦感。そして切なく疼く膣の疼きが、抵抗する意識に反して唇を動かしていく。

(ダメッ！ 魔に誓ったら私はもう人間ではなくなるっ、でも……でも……)

「ちっ……誓います……魂も身体も……私の全てを……あなたに捧げ……永遠の忠誠を……誓い……ます……」

脳に直接響く声に、聖女は淫らな笑みを浮かべながら誓いの言葉を口にしてしまった。取り返しのつかない言葉に、正常な意識は悲しみの涙を流し、快楽に貪欲な肉体が早く悦楽を得たいと、唇の端から涎を溢れさせてしまう。

——ククク、いいだろう。お前は永遠に我らのものだ。さあ自ら脚を開いて膣を広げろ、その魂と肉体、聖なる力とともに穢し尽くしてくれるっ！

「はい……犯してください……私のオマ○コ……メチャクチャに突き刺して……」

快楽に負け、闇に誓った彼女は、もう快楽や魔に抵抗する気力など微塵も残っていないかった。

空中上で仰向けの体勢から、幼児の放尿スタイルに変えられた詩鈴は、自らの意思で細く長い両脚を開き、透明な円柱の壁越しに十二陵戎たちに見せるように、細い指を淫部に当ててポツカリと空いていた秘孔をさらに広げた。

床の六芒星からは、触手とは明らかに違う男の太腿はあろう極大肉槍が生え、その凶悪

ゴナに碎かれたような激痛が胎内から広がり、こらえきれない悲鳴を洞窟中に響かせてしまふ。

挿入された異質ペニスを腹部に浮き上がらせた肢体は小刻みに震え、白喉を仰け反らせて天井を見上げた切れ長の瞳が丸くなるほど見開き、目尻から大粒の涙がポロポロと零れ赤く染まった頬を流れていく。

だが同時に、人間である自分が人外の極大ペニスを受け入れられた優越感が心に芽生え、闇の娼婦になつた喜びが肉体中に広がってきた。

苦痛を感じながらも唇は淫らな笑みを浮かべ、口端から零れた唾液を妖しく頬に伝わせながら、腹部に浮き出したペニスを愛おしそうに撫でてしまふ。

———これでお前は我らの女だ、思うまま快楽を貪り、我らの精を受け入れるがよい。

「は、はひっ………ください………チンポ………私をもつと犯してッ！」

ジュポッ！ ジュプッ！ ジュリユッ！ ジュプッ！

詩鈴の肉体が触手によつて上下に動かされ始めた。秘孔は極太の肉幹で捲れ返り、膣内の全てが掻き出されていくような狂悦感が、闇に堕ちた肉体を痺れさせてくる。

先ほどまで感じていた激痛は、魂が闇に降つた証のように感じなくなり、子宮口を押し広げた巨龜頭が子宮の奥壁を突き上げてくる度に、肉体の全てが溶けてしまふような魔悦が頭の芯を痺れさせてくる。

「くはあああッ！ あううッ！ きゃふッ！ すご……オマ○コいっばい……ひやうッ！ もつと……もつと私をメチャクチャにしてえええッ！」

プシュッ！ プシュッ！ プシヤッ！ プシュッ！ プシヤアアアアッ！

搾り採まれる双美乳を千切れるほど弾ませ、肉体を上下に動かされる度に尿道から潮が噴き出し、繰り返される絶頂に美唇から歡喜の嬌声を奏で上げてしまう。

弾けそうに尖っていた乳芽からはとうとう母乳まで噴き出してしまい、見ている十二陵戎たちの眼を樂しませた。

「んはああッ！ こんな……あうッ！ すごい……ひゃふッ！ 人間のチンポなんて……これに比べたらゴミよッ！ もつとください……もつとおおおおッ！」

隊長たちに犯された時の快楽がゴミに思える魔の快楽に、聖女は青いショートカットの髪を振り乱しながら喘ぎ、腰を激しく振り乱して秘孔と尻孔を力いっぱい締めつけた。

両手は触手に絡み搾られながら大きく弾んでいた二つの肉果実を、自ら寄せ上げるように揉んで谷間に挟まってきた触手を刺激し、周りにミルクを撒き散らしながら疼き痺れる乳悦を樂しんでしまう。

「くアああアアッ！ ひゅごひのッ……あうッ、オッパイもオマ○コのおひりも溶けてふみらいれ……、きゃふッ、いひろ……チンポいひッ！」

一突きごとに感じる絶頂と、尖った乳首をビクビクと震わせながら飛び出していく噴乳

の快楽。そして膣と腸壁をゴリゴリと削りながら、子宮の奥壁とS状結腸を突き上げてくる、極大肉槍と触手の肉体を溶かすような悦痺れに、聖女はとうとう呂律まで回らなくなってしまう。

汗と精液にまみれた肢体は、秘孔と尻孔で淫らな挿入音を鳴らされる度に穢れた体液を周りに飛び散らせ、唇はもう歓喜の喘ぎしか奏でられなくなっている。

「くあんッ！ まらいクッ！ わたひまら……射精ひれ……お腹の中にひっばい……あうッ！ 早ふ精液……奥にッ！」

——クク、いいだろう。我が精を注ぎ込み、その肉体に魔の証を刻み込んでやるっ！
 ジュプッ！ ジュプッ！ ジュプッ！ ジュポッ！

聖女の肉体が壊れるほど上下に動かされ、彼女の腹部に浮き出した極大ペニスが何度も子宮を貫き、聖なる奥壁が突き破られるような勢いで叩かれ始めた。

絶頂を繰り返す聖女の乳芽や尿道からは、絶え間なくミルクと潮が噴き出し、壊れたように広がった秘孔からは大量の愛液が溢れ、子宮を犯す極大ペニスをベトベトに濡らしていく。

彼女の下の床は、上から滴ってきた体液と撒き散らされた聖女のミルクで汚れ、まるで地面に染み込む雨のように、鈍く光り始めた六芒星へと吸い込まれ始めた。

「くあああッ！ ひゅごいのが……すごひのがきちやうッ！ はふッ！ あッ、あッ、あ

あッ！ くあんッ！」

—— さあ我が精を受けるがいいっ、ぐおおおおおおおっ！

「射精ひてッ！ 奥まれ……わらひの全てを穢ひれッ！ オマ○コの中いっばい射精ひれ

……んあッ！ 子宮壊れふまで注ぎ込んれええええッ！」

どびゅぶるるっ！ ごびゆるるっ！ びゅばびゅくびゆるるるるるるるるるるるるっ！

「ひいこううううううううう—— ツ！ 出れるッ！ イクッ……イツちゃ

……、んあアアああああああアアああ—— ツっツ!!」

極大肉槍から大量に吐き出されてきたマグマを思わせる陵辱液に、聖女の子宮は一気に満杯にされ、滑らかなお腹が妊婦のように膨れ始めた。

肉体は膣内から溶かされていくような溶解悦に何度も痺れ、何万ボルトもの電流を浴びたように全身の感覚が消えていく。

乳芽は小指が入りそうなほど乳腺を広げて母乳を噴きまくり、淫らに濡れた瞳からは歓喜の涙が溢れて頬を伝い。大きく開いた唇からは喉が裂けるような狂絶頂の叫びを上げ、自分を犯す異質な声に、人外の絶頂に達したことを告げてしまう。

—— まだだ、まだ射精してやるぞ。クク……。

ドビュルッ！ ビュルッ！ ビュプルルルルルッ！

「ふひゃああッ！ まだ出るのッ!! おひりにも注いれッ……いっばい熱ひのかけれッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>